

香川大学教育学部附属高松小学校の教育

1 学校教育目標 ・豊かな心 ・考える力 ・たくましい心 ・たくましい体

2 研究テーマ

自ら学び，自信をもって共に伸びる子の育成
～探究につながる問題解決的思考をはぐくむパフォーマンス評

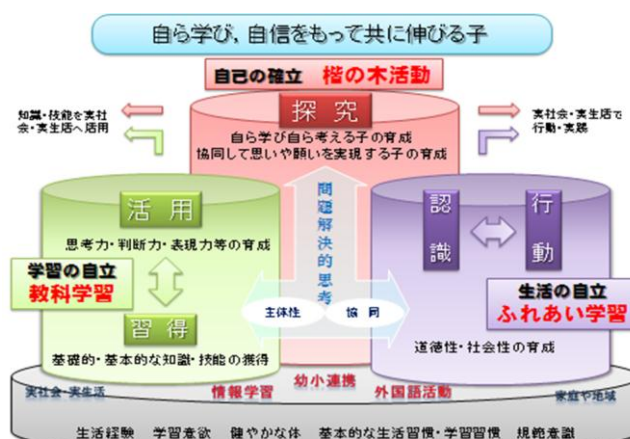
3 目指す子ども像

- (1) 基礎・基本となる資質，能力を身に付け，日本人としての文化を継承，創造していく子
- (2) 健全な価値観をもち，様々な集団の中で他と協調しつつ社会的に自立をしていく子
- (3) 自ら課題を見つけ，主体的，創造的に探究活動を行う中で，自己の生き方を考えることができる子

4 本校のカリキュラム

(1) 学習の自立を促す「教科学習」

これからの知識基盤社会の時代にあって，一人一人の子どもが教科の系統性を踏まえた基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得するとともに，それらを場面や状況に応じて活用し，豊かな問題解決を図ることで，学習意欲を高め思考力・判断力・表現力等の資質・能力をはぐくむ。



(2) 生活の自立を促す「ふれあい学習」

他者との豊かなかかわりを通して，道徳的実践力，異質な集団で協同する力，自分の生き方，集団の在り方についての見方や考え方を高めるなど，子どもの生活の自立を図り，社会の中で自己実現できる子どもを育成する。そのために道徳と特別活動を統合し，認識と行動の統一を図る。

(3) 自己の確立を促す「楷の木活動」

自己の感覚・感性に気付き，自らの思いや願いを実現するために，様々な手段・方法を駆使して解決しようとする態度を育成する。そして，自分なりの目標意識や方向感覚をもって，自らの生き方・在り方を考えていこうとする等，自分自身を奮い立たせ，自己を育てていく態度を促す。

5 本年度の努力点

(1) 問題解決的思考をはぐくむ指導に関する研究の重点 I

・・・研究の重点 I・・・

創造的思考と批判的思考を往還的に働かせることで問題解決的思考を活性化し，主体的で協同的に迫る豊かな問題解決を促すための指導の在り方を探る。

子どもが自分らしく豊かに問題解決するとき、創造的思考と批判的思考の双方を往還的に働かせている。ただし、指導が批判的思考に偏りすぎると、教師の指示的質問や助言が多くなり、子どもにとって授業が面白くなる傾向がある。それらのことを踏まえ、前年度に引き続き、本校では特に創造的思考を活性化することで、より豊かな問題解決を促し、授業改善を図ろうと取り組んだ。そして今年度は、状況に合った往還、思考様式の在り方に検討を加え、そのための指導を構想する。そして、1単位時間や単元レベルでの指導にとどまらず、複数年など長期的な計画を見据えた思考の育成のための指導をも見据えて検討していく。

今年度の指導に関する研究の重点は「協同」である。これまでも取り組んできた問題解決的思考を活性化し、思考力を高めるための手段としての協同にとどまらず、目的的な協同のための指導も含めて検討する。常に留意したいのが子どもの「主体性」であり、子どもが有用性を実感することができる協同、価値を自ら生み出すことのできる学びを構想しなくてはならない。

(2) 問題解決的思考をはぐくむパフォーマンス評価に関する研究の重点Ⅱ

・・・研究の重点Ⅱ・・・

単元や教科領域の枠を越え、長期的に問題解決的思考をはぐくむための指導に生かすパフォーマンス評価の在り

本年度の研究の重点に挙げている問題解決的思考は、量的に評価することが難しい。問題解決の過程において思考した成果は、子どものパフォーマンス（子どもの身体表現を含む様々な表現物など）として表出される。思考など高次の学力を質的に評価する方法として、本校では「パフォーマンス評価」を取り入れている。

パフォーマンス評価は、「パフォーマンス課題」と「ルーブリック」により構成される。「パフォーマンス課題」とは、学習者のパフォーマンス（完成作品や口頭発表、実技の実演など）によって学力を評価しようとする課題であり、より複雑で現実的な場面や状況で知識・技能を使いこなすことを求める課題である。「ルーブリック」とは、客観テストや「～ができる」という行動目標を規準としたドメイン準拠評価では評価が難しい高次の学力について、どのような力をどの場面で評価するのかをあらかじめ定めておき、どの程度できれば目標に達したと見なすのか、その到達レベルを設定した評価指標である。その際、評価基準の各段階には子どものパフォーマンス事例を記載しているので、その事例と照合することによって、個々の子どもの到達状況を把握することが可能となる。

本校は、このパフォーマンス評価を単元終末での総括的評価のためだけではなく、形成的評価にも生かすことを目指した。そのために、パフォーマンス課題は単元全体を規定するサイズの大きなものへ、また、ルーブリックについては単元の学習過程で複数回繰り返して使うことができるものへと改善した。そして、評価(Check)したことを次の指導や授業の改善(Action)に生かすことを意識した。このように、PDCAサイクルを学習評価にも導入し、そのサイクルの繰り返しにより、問題解決的思考をはぐくもうと考えた。

昨年度の研究実践から、パフォーマンス評価の成果が認められた。第一には、単元出口の子どものゴール像を明らかにした上で、指導計画を立てることができたことである。目指すべき問題解決の方向性と、到達すべきレベルを子どもと教師が共有することができた。また、思考を柔軟に働かせて問題解決する期待する子どもの姿を教師が相互に共通理解することにつながり、授業改善に向けた議論が深まった。特に、創造的思考に重点化し授業改善を図る際、ルーブリックはその有効なツールとして生かすことができ、子ども主体の授業が実現できつつあるのではないかと考えている。

反面、課題も明らかになった。パフォーマンス課題の真正性、ルーブリックの妥当性・信頼性、長

期的な評価，ふれあい学習や楷の木活動などの領域特性に応じた評価などが考えられる。これらの課題を踏まえ，以下の点について本年度の研究実践で検討を加え具体化していきたい。

【パフォーマンス評価の検討課題】

- 学びの文脈の真正性を高めるパフォーマンス課題
- 創造的思考と批判的思考の往還に着目したルーブリック
- 長期的な問題解決的思考の育成に生かすパフォーマンス評価
- 領域特性に応じたパフォーマンスに基づいた評価方法改善

本校は，国立教育政策研究所の「学習評価に関する研究指定校事業」を平成23，24年度の2カ年受けており，ここで述べた長期的な問題解決的思考の育成に生かすパフォーマンス評価という視点から研究実践を進める予定にしている。

【学習評価に関する研究指定校事業（本校の研究課題案）】

横断的・総合的な学力を支える問題解決的思考を長期的にはぐくむ評価方法の開発研究
～パフォーマンス課題とルーブリックによる「パフォーマンス評価」を中心として～

(3) その他，今日的な教育課題に対応した教育活動の推進

- ・ 低・中・高学年の宿泊活動などの自然体験，学部訪問などの社会体験・本物体験の充実
- ・ コミュニケーション能力をはぐくむ外国語活動の充実
- ・ 幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るための幼小連携
- ・ 学校評価を取り入れたカリキュラムの改善

6 今年度の初等教育研究発表会

平成24年 2月 2日（木）午後 3日（金）終日

研究授業，分科会，講演

その他外国語活動や幼小連携など今日的な課題に対応した研究授業 全42本の授業公開予定
講演講師 京都大学大学院 教育学研究科 教授 田中 耕治 先生

7 昨年度の初等教育研究発表会から

研究発表会1日目には，問題解決的思考に着目し，パフォーマンス評価を取り入れた学習を全教科で提案しました。2日目には本校のカリキュラム全体を公開し，課題別分科会を行いました。また，文部科学省の田村学先生より「21世紀型学力を育成する」と題し，ご講演いただきました。

今年度の研究発表会には，全国各地より約1700名の参加を得，実りある研究発表会にすることができました。今後も「子ども主体の研究実践」「新しいカリキュラムや教育活動の在り方」「カリキュラム全体での提案」等を追究し，いきいきと学ぶ子どもの姿で発信していけるように努めたいと改めて思いを強くしているところです。本校の研究推進，並びに研究発表会にご指導・ご支援いただきました皆様に感謝いたします。ありがとうございました。



1日目 教科学習

5年 社会科

くらしを変える情報ネットワークの秘密



4年 理科

動物のからだのつくりと運動



1年 生活科

町にいきものランドをつくろう



6年 家庭科

こだわりの料理人になろう



2日目 様々な教育課題に対応した提案

ふれあい学習

認識と行動をつなぎ、個と集団が伸びる指導の在り方を探る



楷の木活動

自ら探究（主体性・継続性・共同性・創造性の発揮）するための方策を探る



外国語活動

コミュニケーション能力をはぐくむための活動の工夫と評価の在り方を探る



幼小交流活動



課題別分科会



楷の木ステージ発表



田村学先生のご講演

